



## ◇江戸初期のいちば

慶長八（一六〇三）年に徳川幕府が開かれ、それ以後、全国の大名家を総動員させて江戸城と、その城下町を作り続けた「天下普請」の時期を経て、萬治三（一六六〇）年に全国的な物流施設としての江戸湊（浅草川河口）に、神田川の舟運機能を内陸部（神楽河岸）現在の飯田橋辺に確立させて、いわゆる大江戸を完成させたころまでに、江戸市中には多数の自然発生的な「いちば」が成立していた。

築城工事に動員された全国の大名家の領地から引き連れられてきた労務者の数は、いろいろな計算方法があるが一応は「千石夫」<sup>せんごくふ</sup> Ⅱ大名の禄高千石につき人夫一人という基準があったが、実際には五十石に一人といった苛酷な割合で工事に従事させた。その場合、大名の禄高の最低は一万石だから二百人、十万石だと二千人、最大の名である「加賀百万石」だと二万人の労務者を国元から連れてきた計算になる。

南北に長い日本列島ではその食

生活も多彩であり、それぞれが日常生活では「見たことも聞いたこともない」ような「普段の食物」の比較が、厳しい濠や石垣などの建設作業の現場で働く何万という労務者の間で、しかも日数が限られた突貫工事の連続の中で、毎日繰り広げられていたのである。

このことは日本人の「普段の食物」の情報が最初にグローバル化した機会であり、いろいろの野菜の種や、その調理法が天下普請の現場で交換したり、教示を受けたことが伝えられる「郷土食」も少なくはない。この場合のように築城工事という場での自然発生的な情報交換も、これまでに繰り返し述べた「いちば」機能に他ならないのである。

## ◇最初の市場

大建設中の江戸では「千石夫」も「五十石夫」の場合も武家の家来だから、その住いは武家地であった。彼等、またはその引率者はその主家である大名に割り当てられた土地を居住地として、いろいろの資材や食料は大名の国元から

運ばれてくるものを消費するのを原則とした。しかし生鮮食品だけはその輸送・保存手段が全くなかった当時では江戸市中の商人から買うことになる。

江戸付近の海岸沿いの漁民が、その収穫したものを担いで市中で売る場合の多くは水際、つまり河岸であり橋の袂や橋の上である。それが鎌倉河岸の魚市場であり、やがて日本橋に移った魚市場や、芝浜の雑魚場である。

山の手では江戸近郊から道が合流または分岐する追分や、峠の小型な地形である坂の上・下や町屋が交差する辻などが行商連雀Ⅱ行商は自衛のため「群雀」のようにつながって商売をした。その場合は公道が《青空いちば》の場として利用された。

後に江戸の《中央通り》である「通り町筋」の最北端の神田連雀町・須田町と、土物店（現在のJR神田駅近く）・京橋大根河岸などの青物（野菜）市場が成立した。そもそも町とは道路を挟んでその両側に店の軒を連ねて、商売する場所が「町」であり、そこに住み商売するものが町人と呼ばれ

た。店は「店」<sup>みせ</sup>とも呼ばれた。先号まで説明し続けた「一遍上人絵伝」の挿絵に見たように、店の中に棚を吊り商品を並べたために店と棚は同じ発音で通用するようになっていった。

そのような仮設的な施設のあり方から、やがて行商・行職が家屋を作り商人や職人として定住出来るような条件が出来ると、商人の場合は仕入れ先と顧客との交通上の便利さや、商品倉庫の確保のために自衛的な同業者の連帯が必要になった。

職人の場合も加工原料の確保（河岸）や燃料と水、例えば紺屋の流水利用などの利便のために、同業・同職の連帯が必要であり、また自衛のためにも「町」は結束することが普通であった。

そのため江戸の町も京都や上方の先進地帯と同じように、町は業種別に纏まって成立し、市場として配置された。それゆえ瀬戸物町では全町が瀬戸物屋、鉄炮町は鉄炮屋だけ、紺屋町・鍛冶町・塗師町・白壁町（左官屋）など同業・同職で町が形成されたのが、近世初期の「町」のあり方であった。



「町」はその自衛施設として、周囲を木戸で固めて木戸番を置き、有る程度の防衛力も備えた。また「各町持ち」の自衛消防組織の司令部としての「自身番屋」がその町の範囲の公道に設置された。「自身」とは、その町の同業・同職の業者自身のことであり、代理人を認めないことを意味した（同時期の西欧の市民に相当する）。さらに制度が整備されると「自身」とはその町の「地主自身」を意味するようになった。

これはかなり時代が下るが、十八世紀前半の享保改革の一環として、江戸の町に「いろは組」による消防が制度化されるまでの、各町ごとの自衛組織の実態であった。

もう一つの町のあり方としての特徴は、「町」の構成員が生国別であったことである。例えば伊勢町・出雲町・因幡町といった国別。堺町・住吉町・難波町・京橋といった先進都市の名を冠した場合の町などである。とくに日本橋の伊勢町は「一町ごとく《いせや》の暖簾を掲げざるものなし」と多くの文献に記録されているよ

うに、町民の一体性が強いこと、代表例として挙げられているほどである。

このように江戸時代初期までの町は、業態も取扱商品についても自衛的・閉鎖的であった。理由は外部からの暴力に対抗するだけの独立性を持たなければ、町の機能は維持できなかったからである。

初期の江戸の町には現在の感覚での「商店街」はなく、消費者は必要なサービス施設（「店」）を求めて、「町」に至る道を歩き回った。それゆえにベストセラー『江戸買物独案内』がよく売れた。

#### ◇「町」と第二次天下普請

慶長十八（一六一三）年に第二次天下普請が発令された。第一次に発令され、その翌年から四年がかりで城を巡るインフラ整備に重点を置いて工事が行なわれた。だから公儀の城としての江戸城の本格建設はこの第二次工事からはじめられたといつてよい。しかしその準備作業は着々として進められていた。

第一次工事と異なり工事は土木工事だけではなく、御殿建築に伴う多角的な業種が必要になった。

將軍秀忠が慶長十六年の暮れに閣僚の安藤対馬守を駿府の家康の下に派遣させ、「江戸舟入堀」工事に可否について決裁を受けた際、家康から「（明年）六月二日に、江戸新開の地に町割り（現在の都市計画の概念に相当）を実施する予定であること」を知らされた。その担当者は金座役の後藤庄三郎光次で、京師・堺津の商人を呼び下し江戸に町屋敷を与えるというもので、それが契機となって「諸国の商人ども多く集まりて、このごろ町屋となりしなるべし」という状況の記録がある（『御府内備考』）。

「商人どもを多く集めるための条件は、第一に地子銭（土地税）を徴収しないこと。第二は土地の割付にあたって営業適地を与えた上、実際の土地の基準の寸法一間六尺を田舎間と呼び、江戸に自発的に移住してきた者にたいする土地の寸法は、実寸法一間六尺を六尺五寸の割合、つまり田舎間一間に対して約七％の優待率を定め、これを京間と呼んだ。

注 草創町と古町

この時期の「諸国商人」が呼び寄せられて町を作ったのを、後世の江戸人はそれ以前の「草創け町」に対して「古町」と呼んでいる。

つまり町地の土地税は取らないが、町人自身の自治的費用（後に「町入用」と呼ばれる）の割り当て基準を約七％安くしたのである。

当時としては当たり前前のこの計算法は、明治以後昭和・平成にいたるまで、いわゆる「京間・田舎間問題」として歴史学者や都市計画家を悩ますタネになっているが、実態はこのようなことが始まりであった。時代の経過とともに公簿に記載されたいわばマル優表示である京間寸法を、実際の長さとして取り扱う輩が続出したのは延享年間（一七四四～四六）からのことであった。

#### ◇本町の意味

江戸の本町の意味はその文字の通り「天下の総城下町の中心市街地」を意味した。より正確にいえば江戸城の正門である大手門か

ら、放射状に付けられた道路（奥州道中）の起点に作られた町並みが本町である。

その一丁目には奈良屋（館姓）、二丁目には樽屋（枩座兼帯）つまり町人代表を兼ねて、東北三十三ヶ国の度量衡の量の原器としての枩の検定機関）があり、三丁目には喜多村家、と江戸の町人を代表する三人の町年寄（世襲で江戸の都市行政の町人側の執行役を勤めた。強いて現在の職能に当てはめると東京都副知事といった所である）の役宅兼住居地があった。この意味では本町は管轄別の「都庁ビル」が三カ所にある官庁街でもあった。

この官庁のある町並みには先にちよつと触れた家康の実子である後藤庄三郎光次が長官を務めた金座（金及び金貨行政・両替業務）などの公儀（幕府のこと）の貨幣制度の中心機関が置かれた。現在の日本銀行の場所がその金座跡であることはいうまでもない。

なお二丁目に直交する形に本革屋町があるが、これは次ぎに述べる金吹町とともに公儀の小判製造所関連の町である。小判製造に

は鞆（送風器）が必要であり、その鞆には送風器のバルブ（弁）用に獣皮「革」を必要とした。

これらの業務は商人というより職人としての技能者が集住する「町」であった。商店としては、このような官庁街と工場の間に官庁の公務に必要な贈答品を売る店（扇子・鯉節・種々の包み紙類）や生菓屋などの町が形成された。その名残は現在のビルが建ち並んだ日本橋の町並みに、なお色濃く残されている。

この本町は現在の中央区日本橋地区に主要街道に沿って三筋の「本」を冠称する町が配置された。一つは江戸城の正門である大手門の外郭門としての常磐橋門を起点に、東の神田川が浅草川（現在の隅田川）に合流する地点に造られた浅草橋門を出て、北側に折れて「突き当たり」にある浅草観世音の脇をとおって千住に至る奥州道中の道筋が、江戸城本来の向きの本町である。

言葉を変えれば江戸城の戦略的正面は東北地方に向いていたのである。常磐橋門正面の本町（一、四丁目）の町筋が江戸北方への

メイン・ストリート。その北側に本石町（一、四丁目）、さらにその北側に本銀町（一、四丁目）の町筋があった。本石町の石町とは「石の地蔵さん」のストーンではなくて、液体や米の分量を測る単位勺・合・升・斗・石、「加賀百万石」の「石」であって、小網町辺にあった石神井川河口からこの辺りに米を積んだ船の漕があった場所をそのまま「本石町」の町筋にしたものである。

三番目の本銀町は慶長十七年に駿府（静岡市）にあった銀座を江戸に移すまでは、金座と並んで銀に関係する職能の町があったことを物語る町筋である。江戸の大口を支える米河岸を挟んで南に金座、北側に白銀を扱う経済上の都心が形成されていた。

注 ただし現在の町の並び方は、住居表示法の実施で大幅に変更されてしまったので、そのことを承知して置かないとこれからの説明と、現況は一致しないことを始めに断っておこう。

地図を見れば明らかのように、現在の小網町の北に続く堀留公園

の跡の旧東堀留川と小舟町の西端の西堀留川だった二本の入り堀があった場所が、上野の不忍池から続く旧石神井川河口である。

この城と町筋のあり方は、江戸時代から引き続いた日本橋地区と神田地区の多種多様な商工業の商圏が、昭和三〇（一九六〇）年代に始まった経済の高度成長期が最高潮に達するまで、東北地方から北日本全体に拡大していった傾向とも一致している。つまり江戸城の向きと江戸・東京商圏の向き的一致は、江戸から昭和の終わりの経済のグローバル化が始まるまでの約四百年間続いていたのである。

なお付け加えれば大正十二（一九二三）年の、関東大震災の復興事業の目玉として建設された昭和通りと、今はその上にそって走る首都高速道路はじめ、ごく最近の《つくばエクスプレス》の開通まで、上方・関西と東京を結ぶ太平洋岸交通路線とは一味違う方向性を見出せる原点が、日本橋の三つの本町筋なのである。

（鈴木理生）